農山漁村における事前復興のあり方

Disaster Risk Reduction of Rural Areas

岡田 知子*

Tomoko OKADA

1 はじめに

日本は世界でも有数の地震多発国であることはいうまでもない。また、地震だけでなく台風の常襲地帯でもあるため、毎年のように暴風、豪雨、高潮等の自然災害にも見舞われ、多大の被害が生じている。とくに農山漁村は居住地のみならず生産地が被害を受け、災害復旧・復興を難しくしている。加えて、過疎化、高齢化の進行により内在していた諸問題がより顕在化し、問題が深刻化している。しかしながらこのような農山漁村には魅力ある美しい集落が多く存在する。これは自然環境を丁寧に読みとり修正しながらその環境に最も相応しい生活環境を時間をかけて構築してきたからに他ならない。自然を生産と生活の基盤とし、地勢を読み取り、水の流れを見極め、春夏秋冬の気象にあわせ、より合理的な生産、より快適な空間構成が追求されてきた。猛威を振う自然現象に備えながらも日常生活を快適に過ごせるよう様々な工夫が施され、ひとたび災害になればその都度修正が加えられ、より安全な生活環境が追求されてきた。こうした営みは「減災」に相通じるものがあり、そもそも伝統的な農山漁村には減災のシステムが内在していると考えられる。

2 津波への対応

時には想定を超える自然現象により、多大な被害が生じることもある。東日本大震災では沿岸部の多くの集落が想定外の津波により未曾有の被害を受けことは周知のとおりである。しかし、被災地は津波常襲地帯である。度重なる津波被害に対してこれまで幾度となく居住地の高所移転が行われてきた。にもかかわらず甚大な被害を受けた。これは低地への再居住化によるもので、災害の脅威が忘れられた頃に低地に住居が立地し始めるのである。山口弥一郎氏の三陸津波に関する一連の研究からもその点が指摘されている。

一方で過去の被災により居住地を高台に移転していたため、今回は津波による被害がほとんどなかった集落も少なからずある。筆者は津波被害を回避した三陸沿岸集落においてその立地特性や歴史的背景および土地利用や生業について実態を調査した。まず、岩手県大船渡市役所および陸前高田市役所において流出家屋が0戸であった沿岸部の集落について聞き取りを行い、該当集落について現地確認と住民へのヒアリング調査を実施した。

調査した集落の多くは1933年の昭和三陸津波の被災を受け、高台に移転していたため、どの集落も流出した家屋はゼロであった。ただし、浜に設置された長屋（漁具倉庫）は多くが流出、船もまたほとんどが流出したようである。さらに、各集落の防潮堤は地盤沈下するなど何らかの被害を受けている。

浜と集落の距離について一番近い住居までの直線距離と高低差を地図と現地での目視により判断したところ、どの集落も20m以上の高低差がある。山口弥一郎氏の研究によると海からの距離が300m以上、高低差10mを超えると、海側に再居住するとされているが、各集落とも20m以上の高低差があるにもかかわらず海側の低地への再居住は見られない。これには以下の理由が考えられる。ひとつはもともと海岸沿いに平地がほとんど無い急峻な斜面地である場合、もう一つはかつての浸水域が農地として土地利用が確立しており再居住し難かったことが考えられる。もちろん、津波による被害が語り継がれ、過去の教訓が生かされて被害を免れたことはいうまでもない。また、住民は軽トラックで自宅と浜を行き来しており、近年の自動車や携帯電話などの普及が海から距離が離れていても漁業を中心とした生活を成立させている、と考えられる。さらに、漁業形態によっては漁業倉庫を必ずしも浜に設置する必要はなく、むしろ自宅そばにある方がいいことも確認できた。

なによりも、漁業従事者にとって最も重要なことは居住域から海が見えること、であることがヒアリングから

*西日本工業大学 Nishinippon Institute of Technology

Keywords：1）事前復興，2）共同体，3）心のよりどころ

わかった。常に海を見て生活できることが求められている。むしろ、高台に移転したことで防潮堤越しに海を見ることが可能となり、高い防潮堤に囲まれた低地より視覚的にも海が近くなったともいえる。

海から居住域までの開けた平地を農地として利用し、その高台を居住域とする土地利用のあり方は津波常襲地帯において適切であり、景観も美しく、海を見て暮らすという漁師にとって最も重要な要求も満足させてくれる。こうした居住地のあり方は人々が自然現象に立ち向かいながら修正を加え、より安全で快適な居住環境を構築してきた結果といえる。

また、沼野夏生氏は調査によりタイムラグを伴った個別の高所移転を見だし、ライフステージの視点を含意する「時間差高所移転」の可能性を指摘している。従来考えられてきた以上に沿岸部の住民は津波の脅威を心に刻んで日々を送ってきた、という。諸条件からすぐに移転が困難な場合、まず現地で再建し、条件が整うのを待って移転を実行に移す。時にはそれが30年も先に世代交代を経た頃に実行される。そうした粘り強い営みの事例がいくつもみられ、経済的・技術的に限られた選択肢しか選べなかった時代において、考え抜かれた「減災の知恵」が息づいていた、としている。

以上のように伝統的な農山漁村の集落の多くは厳しい自然現象に対処し、自然環境を読みとり、最善の環境やシステムを構築し、時には修正を加えながらその環境に最も相応しい生活環境を時間をかけて構築してきた。もちろん、居住地や集住空間といった物理的環境のみならず、集住文化や共同体を維持するシステムについても最適化し再構築してきた。その中でも筆者が最も注目している点は共同体の力である

3 共同体の力

2005年の福岡西方沖地震の震源に近かった玄界島では一時、全島避難を余儀なくされるなど最も大きな被害を受けたが、人的被害はゼロであった。これは島のコミュニティがしっかりしていたため、お互い協力しながら迅速な避難行動ができた結果と考えられる。コミュニティの重要性はどの被災地でも指摘されている。このようなコミュニティは玄界島の特徴ある集落空間構成が育んだといっても過言ではない。急峻な地形のため限られた土地のなかで地形に寄り添うように住宅が高密度に建てられ、隙間を縫うように決して広くない道がつけられ各住戸をつなぎ、各戸の入り口が連なる、このような集落空間構成と相隣関係が濃密なコミュニティを形成した要因のひとつといえる。また、高密度居住がゆえに火災に対する防災意識が高く、玄海島婦人消防隊が結成され、避難

訓練などの活動を日常的に実施しており、その他に町内会は元より漁協、水上消防団、青年団、老人会、納税協力会、八軒竈など様々な社会組織が重層的に構成され、強固な地域コミュニティが形成されていたと考えられる。もちろん地盤や構造物の耐震性能を高め物理的な強靱さを追求することは防災上必要であるが、最も重要なものは共同体であると筆者は考えている。良好なコミュニティは防災時や避難生活においては必要欠くべからぬものであるが、復興時においても重要な役割を果たす。玄界島は防災から3年後に復興事業が終了した。東日本大震災の被災地での復興の状況と単純には比較できないが、驚異的な早さである。これはなんといっても島民が一丸となって復興事業の方針をいち早く決定したことによると考えている。当時の島での生活はお互い助け合わなくては成立しない、自己都合より島のコミュニティが優先される、という島特有のコミュニティが迅速な決断を促したといえる。復興事業については多くの課題はあるが、島民が団結して、その多くが速やかに帰島してコミュニティを継続し、震災前に抱えていた未接道宅地や斜面地の上下移動などの問題を解消して住宅や基盤施設などを整備し、漁業を中心とする生業の継続性を損わず社会経済を連続的に回復したことは、復興の目的を考えるとまずは成功したといえる。大げさにいえば共同体の力が復興事業を牽引したともいえる。ただ、復興事業の方針をいち早く結論を出したことが良かった、ということでは決してないということを強調しておきたい。

4 共同体の維持

伝統的な農山漁村の集落をみると。いくつかの共通点がある。そのなかで計画学からみて注目すべき点は、①集住空間の中に多機能複合型の空間が多様な魅力ある形で存在していること、②多くの意味づけられたモノや空間で溢れていること、③これらのモノや空間を形成維持するために祭りや儀式といった仕掛けが用意され継承されていくしくみがあること、結果として、④自然環境と共生し、持続的な環境形成がなされ、良好な共同体を形成している、そして⑤なにより美しく仕立て上げているという点にある。

こうした共通点は集落をとりまく自然・風土や社会構造、世界観により表れ方やあり様が違う。同じものは存在しない。現象的には多様な集落空間として存在するが、そのベースには共同体を維持し、存続させるという規範がある。

集落内には、人々の心をひとつにまとめてきた集住のしくみがある。そこには共同体を維持し、持続させるための意味づけられたモノや空間が存在するが、それは明

らかに意図的なもので、そこには自然や風土的な要因よりもはるかに強力な力が働いている、と考えており筆者の研究の主眼はここにある。

集落内の空間は単に住民を自然や外敵から守るためにだけ機能しているのではなく、そこには共同体を維持し、持続させるための空間的な意味付けがなされていて、全体がひとつの自律した体系として機能するような仕組みが備わっている。集落内には様々な意味づけられたモノや空間が存在しているが、その配置や配列、あるいは表われ方といったものは時間をかけて調整され、できあがったもので、決して自然発生的に生成されたものではない。

それらは共同体として共有する価値観や信仰、世界観、宇宙観が投影されたものだが、モノや空間といった目に見えるかたちとして表現することでより明示的になり、人々の意識の中に共有の価値観、連帯感として刷り込まれていく。こうして人々の心をひとつにまとめた。

5 心のよりどころ

明示的なモノや空間とはどのようなものか。たとえば、淡路島豊島地区ではわずか20haの中に一覧のような23もの神社やお堂が存在する。これがいわゆる明示的なモノや空間のひとつと考えている。実はこの地区は1995年1月の阪神淡路大震災により917戸のうち413戸が全壊した。半壊256戸、一部損壊136戸を含めると、9割近い被害となり、旧北淡町の中でも最も被害の大きかった地区である。

豊島は古来内海漁業が発達してきたが、生魚運搬業でも大いに発展した地区である。小規模な住居が密集し集落内の道路は狭く空地が少ないにもかかわらず、神社、祠堂、寺等の多様な祭祀空間がきめ細かく配置されている典型的な漁村集落であった。

これら祭祀空間の復興状況について震災後1年、10年、20年ごとに調査を実施した。表は時系列にまとめたものである。

近年建て替えられたものや小さな祠等は大きな被害がみられなかった。しかし、全壊は10ヶ所にもおよび被害の大きさがうかがえる。全壊した10ヶ所のうち、震災後1年を経ても建物が撤去されたままで再建されていないものは3ヶ所のみであった。他の7ヶ所はたとえ仮設であっても何らかの形で再建していた。特に、金比羅神社は震災後1年にして本殿を建

替え、見事に再建した。また、恵比寿神社は仮設の本殿ではあるが、お社と鳥居を再建し、えびす祭を実施した。さらに、本殿の再建へ向けて収益を得るため境内を駐車場にするなど意欲的であった。八幡神社、伊勢神社は建替え中で、着々と再建していた。また、全壊を免れたものもそのほとんどがきれいに整備されていた。以上のように震災1年後の状況からは、祭祀空間を守り続けようとする人々の強い意志を感じた。

復興の事業方式は土地地区画整理事業が採用された。1996年8月には事業計画が決定し、仮換地指定率100%を達成したのは2005年3月で10年の歳月を要した。その間、祭祀空間の再建は着実に進み、震災10年後の段階で仮設の状態であったのは恵比寿神社、薬師堂、興久寺の3ヶ所のみ、また、生福寺は再建中であった。震災20年後、恵比寿神社と観音堂、生福寺は見事に再建を果たしていた。結果、23ヶ所の祭祀空間のうち、再建できなかったものは仮設を除くと2ヶ所のみである。

以上のように、たとえ復興事業の関係で時間を要したとしても何れはそのほとんどが再建している。そして用地取得から建設まで再建に必要な費用は全て寄付や蓄財で賄われており、まさに住民自らの手で守り継がれている。このことはこれら祭祀空間がいかに重要であることを示している。そして祭祀空間の再建が人々の心をひとつにまとめ、復興への原動力となったと考えられる。

自らも被災した状況においても継承しようとするのはそこに「心のよりどころ」を求めているからにほかなら

表 祭祀空間の被害と再建の状況

名 称	1995年被害状況	1996年(1年後)	2005年(10年後)	2015年(20年後)
1. 八幡神社	一部全壊	建設中	再建	
2. 大歳神社	一部全壊	全壊部分を撤去	本殿再建	
3. 伊勢神社	全壊	建設中	再建、移築	
4. 住吉神社	半壊		再建	
5. 恵比寿神社	全壊	仮設	仮設	再建
6. 蛭子神社	大きな被害なし			
7. 金比羅神社	全壊	本殿再建		
8. けさと大明神	大きな被害なし		区画整理事業により消滅	
9. 稲荷神社	大きな被害なし			
10. 稲荷神社	未確認(その後、震災直後撤去を確認)			
11. 稲荷神社	全壊	撤去	再建	
12. 薬師堂	全壊	仮設	仮設	仮設
13. 西向き地藏	大きな被害なし			
14. 観音堂	全壊	撤去		再建
15. 大師堂	全壊	撤去	再建	
16. 地藏	大きな被害なし		移設、再建	
17. 地藏	大きな被害なし			
18. 興久寺	全壊	仮設	仮設	仮設
19. 金光教教会	全壊	仮設	再建	
20. 生福寺	全壊	仮設	建設中	再建
21. 東の町神輿蔵	半壊		再建	
22. 中の町神輿蔵	大きな被害なし			再建
23. 西の町神輿蔵	大きな被害なし			再建

ない。また、祭祀空間では何らかの祭事が行われており、それを担う人々の存在がある。この祭事を通して人々に場所や景観として記憶され、継承され、時と共に地域への愛着を生み、地域コミュニティを育むことになる。

こうした祭祀空間だけでなく、中越大震災の被災地では伝統行事である「牛の角突き」を震災7ヶ月後に仮設闘牛場で開催した。また、東日本大震災による原発事故で開催が危ぶまれた「相馬野馬追」もまた震災した年に執り行われ、人々の心のよりどころとして途絶えることはなかった。こうした伝統的祭礼や民俗文化を継承することが人々の心をひとつにまとめ、復興への原動力になったものと考えられる。

6 集住の変容

伝統的な集落はその集住文化を変容せず強固に守り続けてきたかのように見えるが常に変容していると考えられる。時と共に最適化と再構築を繰り返し、変化している。下図はJR小倉駅の東500mに位置する長浜町で1602年、小倉城築城の折りにこの地に移転させられた漁村の集落構造である。今もなお古いコミュニティが残されており、江戸時代から西、先、宮、中、東の5丁のコミュニティの単位に分かれていたとみられ、現在に踏襲されている。計画的に作られたため、その集落構造は規則性があり明快である。

街路は東西方向に通る「ハマ」「ナカミチ」「ウラミチ」と南北方向に各住戸の間を通る「ヘイヤ」と呼ばれる路地、丁界を分ける「オオヘイヤ」で構成されている。各丁は海、浜、山を南北に貫く縦割りとなっており、丁内の結びつきは強固であったとされている。また、各丁により得意とする漁法が違っており、丁内で伝承されていた。このようにコミュニティの単位と集落構造が深くかわっていることがわかる。さらにこの丁内のコミュニティを強固にするしかけの一つとして祇園祭がある。

小倉祇園は全国的にも有名な祇園社の祭りの一つであるが、この集落からも各丁内ごとに山車を出して祭りに参加している。小倉祇園は丁内にとって一大行事で一ヶ

月前から太鼓の練習をするなど子供から大人まで一丸となってとり組んでおり、丁内をひとつにまとめ、共同体を育む重要な役割を担ってきた。太鼓を打ち鳴らす現在のスタイルは意外にも新しく明治以降からで、長浜各丁内の山車もその頃、順次、導入され、現在に至る。このように丁内の共同体を維持し、存続させるという規範が共同体を育む仕掛けとしての新しいスタイルの祭りを受け入れた、と考えられる。さらに、集落全体をひとつにするシンボルとしての神社があり、その祭りでは神輿をかつぐ。この他にも町内に点在する歴史のある資源が伝承されているが、それぞれの文化的資源とそれを守る行事と集団が幾重にも重なり層のように存在し共同体を維持してきた。

7 おわりに

近代化は集住文化の変容を迫り、多くの伝統的な集落空間の変容を余儀なくしてきた。これはこれまで集落が時間をかけて調整してきた最適化と再構築の一つの段階とみることもできる。が、かつての集落の規範であった共同体の維持、存続に第一義的意味を見いだせなくなったため、これまでとは違う経済的、合理的、単一機能的な論理が働いた結果と考えられる。

人口減少、低成長時代における農山漁村の事前復興は共同体の力に頼らざるを得ない。そのためにはまず、集落の人々の心をひとつにまとめて共同体を維持することの意義について再認識する必要がある。その上で集落に内在している最善の環境とシステムについてその意味を読みとり、その価値に気づいていない集落の人々と共に再評価し、共有化し、次世代へ継承していかなければならない。時間をかけて調整されてきた集落の一つ一つの事例が近代的計画に欠けていた点を教えてくれる。計画がすべてを満足させるものではない。計画が残していった余白をどう埋めるのか。集落は多様な意味を私達に語りかけている。

参考文献

- 1) 岡田知子・柴田加奈子 (2014): 「東日本大震災において津波被害を回避した三陸沿岸集落について―震災復興計画のあり方に関する研究 その17―」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-2, pp.3-4.
- 2) 沼野夏生 (2015): 「イエとムラのライフステージと減災の知恵」, 日本建築学会大会農村計画部門研究協議会資料, pp.21-26.
- 3) 岡田知子他 (2015): 「旧北淡町豊島地区における祭祀空間の復興について―震災復興計画のあり方に関する研究 その18―」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-2, pp.69-70.

図 集落構造